

## 万葉集卷十三と卷十一・十二

— 両者間の類歌を通してその所収歌の実態を考える —

村瀬 憲 夫

### 一 はじめに

万葉集の巻々の編纂と成立を考えようとする時、その巻に収められた歌々の実態を明らかにすることがまず必要である。本稿では、卷十三と卷十一・十二とを取り上げ、この両者の所収歌を比較する中で、その所収歌の実態を探り、もって卷十三、十一、十二編纂論への基礎作業としたい。

卷十三、十一、十二のように、柿本人麻呂歌集以外は、その殆どが出典不明の作者未詳歌からなる巻々の所収歌の実態を考える場合、互いに類歌関係にある歌を対象として考える方法は、すでに古来行われており、確かに種々の問題と限界は有するものの、今もって有効な方法である。本稿では、以上のような意図と位置づけのもとに、卷十三と卷十一・十二との間に類歌関係にある歌を取り上げ、その所収歌の実態の一端を明らかにすることを目

的とする。

二 卷十三長歌中の一部分と卷十一・十二所収歌が類歌関係にある場合

本稿で対象とする卷十三と卷十一・十二所収歌中、互いに類歌関係にある歌を列挙し、その一つ一つについて若干の考察を加えていくこととする。

対象Ⅰ ⑬三二五〇末尾部分と⑫二九七九

◆蜻蛉 倭之国者 神柄跡 言挙不為国 雖然 吾者事  
上為 天地之 神文甚 吾念 心不知哉 往影乃 月  
文経往者 玉限 日文累 念戸鳴 胸不安 恋烈鳴  
心痛 未逐尔 君丹不会者 吾命乃 生極 恋乍文  
吾者将度 犬馬鏡 正目君乎 相見天者杜 吾恋八鬼  
目く

(⑬三二五〇)

反歌

大舟能 思憑 君故尔 尽心者 惜雲梨 (⑬三二五二)  
久堅之 王都乎置而 草枕 羈往君乎 何時可將待  
(⑬三二五二)

柿本朝臣人麻呂歌集歌曰

葦原 水穗国者 神在隨 事拳不為国 雖然 辞拳叙  
吾為 言幸 真福座跡 恙無 福座者 荒磯浪 有毛  
見登 百重波 千重浪尔敷 言上為吾 (⑬三二五三)

反歌

志貴嶋 倭国者 事靈之 所佐国叙 真福在与具

(⑬三二五四)

右五首

★真十鏡 直目尔君乎 見者許増 命対 吾恋止目

(⑫二九七九)

☆……吾恋兒矣 玉釧 手尔取持而 真十鏡 直目尔不

視者 下桧山 下逝水乃……

(⑨一七九二 田辺福麻呂歌集)

卷十三「相聞」部に収められた三二五〇番歌末尾部(波線部)と卷十二の「寄物陳思」部に収められた二九七九番歌とが類歌関係にある。

三二五〇～二番歌は、「右五首」の左注によって、三

二五三～四番の柿本朝臣人麻呂歌集歌と共に一連の歌として並べて置かれている。ところがこの人麻呂歌集所出の歌は海外へ旅立つ者(恐らく遣唐使に関わる者)へのはなむけの歌であって、直接的に相聞感情を述べた歌ではない。三二五〇番歌は、三二五三番歌の冒頭部を用いて、それに相聞表現を継いで相聞歌に仕立てたものである。番えられた反歌二首の「大舟能」、「王都乎置而 草枕 羈往君」などという表現は、三二五三～四番歌からの影響下にあり、直接の長歌である三二五〇番歌からはすぐには導き出しにくい表現である。そして三二五〇番長歌の波線部の四句は、いかにも取って付けた感を否めない。文脈上は波線部の前で終わっても全く構わないし、むしろその方が自然であると言ええる。

以上を纏めると、三二五三番歌を核にしてそれに相聞表現を増補し塗り固めて、ひとつの相聞長歌として成ったのが三二五〇番歌であり、その相聞表現の増補塗り固めに用いられた歌のひとつに、現在卷十二に収められている二九七九番歌のような歌があったのである。今「二九七九番歌のような」と述べたのは、作者未詳歌間の類歌の場合は、二九七九番歌が三二五〇番歌に採られたといった、歌を特定した直接的な継承関係を想定するより

も、二九七九番歌のような表現が三二五〇番歌に付着していったと考えた方がよいからである。以下の叙述では、「のような」の部分を省略するが、意図するところは同じである。

ともあれ三二五〇番歌の生成に卷十二所収歌の基盤が関わっていること、つまり卷十三の所収歌と卷十二のそれとが、その成り立ちに共通の基盤、共通の世界を有していたことを確認できるのである。

なお、卷九の一七九二番歌に見られる類似表現は、田辺福麻呂歌集所出という新しさから判断して、卷十二、卷十三の表現に依ったものであろう。

# 対象Ⅱ

⑬三二五八の一部分と⑪二四九五・⑫二九九一

◆荒玉之 年者来去而 玉梓之 使之不来者 霞立 長春日乎 天地丹 思足椅 帶乳根笑 母之養蚕之 眉隠 氣衝渡 吾恋 心中少 人丹言 物西不有者 松根 松事遠 天伝 日之闇者 白木綿之 吾衣袖裳 通手沾沼

(⑬三二五八)

# 反歌

如是耳師 相不所有者 天雲之 外衣君者 可有々来

(⑬三二五九)

# 右二首

★足常 母養子 眉隠 隠在妹 見依鴨

☆垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿

異母二不相而 (⑪二四九五 柿本人麻呂歌集)

▽……天伝 入日刺奴礼 大夫跡 念有吾毛 敷妙乃 (⑫二九九二)

衣袖者 通而沾奴 (②一三五 柿本人麻呂)

長歌中の波線部の表現は、卷十一の人麻呂歌集所出歌及び卷十二の出典不明の作者未詳歌にそのままの形で見られる。また二重傍線部の表現は、人麻呂の石見相聞歌(②一三五)に類似した表現を見出すことができる。

波線部の表現は、人麻呂歌集歌にも卷十二の出典不明歌にも見えることから、この表現は広く流布していたことが想像され、その意味で、さきに対象Ⅰで見た三二五〇番歌の場合よりもさらに漠とした状況で、卷十三の歌と卷十一・十二の歌とが世界を共有していたことを確認できる。

# 対象Ⅲ

⑬三二七六の末尾部分と⑫三〇〇二

◆百不足 山田道乎 浪雲乃 愛妻跡 不語 別之来者 速川之 徃文不知 衣袂笑 反裳不知 馬自物 立而

爪衝 為須部乃 田付乎白粉 物部乃 八十乃心叫  
 天地二 念足橋 玉相者 君来益八跡 吾嗟 八尺之  
 嗟 玉梓乃 道来入乃 立留 何常問者 答遣 田付  
 乎不知 散鈞相 君名曰者 色出 人可知 足日本能  
 山從出 月待跡 人者云而 君待吾乎 (13三二七六)

反歌 眠不睡 吾思君者 何処辺 今夜誰与可 雖待不来

右二首

★足日本乃 從山出流 月待登 人尔波言而 妹待吾乎

(12三〇〇二)

長歌の末尾部の五句と卷十二の歌とは、ほとんど同じ歌と言つてよい。『萬葉集全註釋』が、卷十二の三〇〇二番歌は卷十三の三二七六番歌から「独立した一首の短歌になつてゐる。しかし歌意は、独立した一首としては、表現が不完全であり、原形としてはかような長歌の一部として、歌い伝えられていたものであらう」と指摘するのは、卷十二の短歌のみでは、月の出を待つのを口実に男が女を待つという状況の説明が不十分であるところにある。確かに長歌では、波線部の前の部分が波線部の行動に至る状況の説明になつていて、文脈は滑ら

かであり破綻はない。その意味で、この場合は、長歌の末尾部が分離独立して、単独の短歌となつたと考えることも出来よう。前野貞男「万葉集卷十三管見」(『上代文学』第一号、一九六一・五)も「長歌の一部が短歌に変形したもの」としている。

ただその一方で、この長歌は、その区切れ目は必ずしもはっきりしないものの「馬自物 立而爪衝」あたりまでが男の立場の歌で、それ以下が女の立場の歌となつていて、はっきりとした問答というような形を取らずに、一首の中に男女双方の立場が混在するという様相を呈している。また女の立場に転換する「為須部乃 田付乎白粉」の表現は、後掲(対象Ⅳ)の卷十三の三二七四番の長歌の冒頭部と同じである。さらにはまた「立而爪衝」は笠金村の神亀元年紀伊国行幸時の作(④五四三)に見え、男女の立場は逆ながらよく似た発想を有しているし、「玉梓乃 道来入乃 立留 何常問者」は、同じく笠金村の志貴皇子挽歌(②二三〇)に同様の表現が見られる。この両者の影響関係は両様に考えられるが、金村の歌が、歌詠の状況に即して、劇的な場面設定をしていて、その表現が臨場感と独自性・個性を有している点から言つて、金村の表現と発想を取り込み継ぎ接ぎして膨らんで

いったのが三二七六番歌であると考えるほうがよいと思われる。

三二七六番歌は、このように文脈上曖昧に男女の立場が混在していること、類似した表現が他にも見られること等の点から判断すると、この長歌はかなりの流動性を有し、種々の相聞表現を取り込み継ぎ接ぎをしながら膨らんでいった歌と思われる、その意味では巻十二の歌が長歌に取り込まれていった可能性も十分にある。

結局この場合も、どちらからどちらかへの一方的な影響と断定することは難しい。確かに言えるのは、巻十三長歌の末尾部と巻十二の短歌が流動的に交流しあうという両者の世界の共通性である。ちなみに長歌の波線部が「君」となっているのに対して、巻十二の方は「妹」となっているのも、これらの歌の自在な流動性を思わせる。

# 対象Ⅳ

◆白雲之 棚曳国<sub>⑬</sub>之三三二九の一部分と⑪三三七三・⑫二八七七等

者 妾耳鴨 君尔恋濫 吾耳鴨 夫君尔恋礼薄 天地  
満言 恋鴨 曾之病有 念鴨 意之痛 妾恋叙 日尔  
異尔益 何時橋物 不恋時等者 不有友 是九月乎

吾背子之 僂丹為与得 千世尔物 僂渡登 万代尔  
語都我部等 始而之 此九月之 過莫呼 伊多母為便  
無見 荒玉之 月乃易者 將為須部乃 田度伎乎不知  
石根之 許凝敷道之 石床之 根延門尔 朝廷 出座  
而嘆 夕庭 入座恋乍 烏玉之 黒髪敷而 人寐 味  
寐者不宿尔 大船之 行良行良尔 思乍 吾寐夜等者  
数物不敢鴨 ⑬三三二九

右一首

★何時 不恋時 雖不有 夕方任 恋無乏

☆何時奈毛 不恋有登者 雖不有 得田直比来 恋之繁母 ⑪三三七三 柿本人麻呂歌集

⑫二八七七

▲人所寐 味宿不寐 早敷八四 公目尚 欲嘆 或本歌

云 公矣思尔 曉来鴨 ⑪二三六九 柿本人麻呂歌集

△白細之 手本寛久 人之宿 味宿者不寐哉 恋將渡

⑫二九六三

◇為須部乃 田付叫不知 石根乃 興凝敷道乎 石床笑

根延門叫 朝廷 出居而嘆 夕庭 入居而思 白袴乃

吾衣袖叫 折反 独之寐者 野干玉 黒髪布而 人寐

味眠不睡而 大舟乃 往良行羅二 思乍 吾睡夜等呼

読文將敢鴨 ⑬三二七四

波線部、二重傍線部の表現が、卷十一、十二に見られる。卷十一のものはいずれも柿本人麻呂歌集所出である。また人麻呂歌集所出の二三六九番歌には「或本歌」との異同が付せられており、この歌が広く流布していたことが分かる。

注目されるのは、当該三三二九番歌は卷十三の挽歌部に収められているが、相聞表現を多分に含んでおり、とりわけ後半部の「將為須部乃 田度伎乎不知」以下は、卷十三の相聞部に収められている三二七四番歌と表現・内容・発想共に酷似しており、ほとんど同一と言ってよい。おそらく三三二九番歌は、挽歌であることを念頭におきつつも、三二七四番の相聞歌を主として、卷十一、十二に見えるような相聞表現を吸収しつつ、出来上がった歌であろう。

ここにも三三二九番長歌の形成に、前掲の四首に代表されるような卷十一、十二の広い裾野をもつ世界が関わっていることを確認できる。

以上、長歌中の一部の表現と卷十一、十二のそれとが類似した歌を対象として見てきた。ここに対象として掲げた四例に関する限り、卷十三の表現が卷十一、十二へという一方の流れを考えるよりは、卷十三長歌の表現

の形成に、卷十一、十二に代表されるような裾野の広い世界が、同時代的に、同空間的に関わっていたと見るのが適切であると思われる。卷十三に収められた歌々は様々である。古い歌謡ばかりではない。新しい歌謡もある。本節で対象とした歌々はその新しい歌に属するように思われる。卷十一、十二の歌とはほぼ同時並行的に膨らんで成った歌と言えよう。

### 三 卷十三反歌と卷十一・十二所収歌が類歌関係にある場合

卷十三の長歌に付せられた反歌は、長歌に原初から付せられていたのではなく、長歌に遅れて後に付せられた場合が多いことは、すでに広く具体的に指摘されている。そのことをも念頭に置きながら、卷十三の反歌と卷十一、卷十二の歌とが類歌関係にある例を具体的に見てみよう。<sup>1)</sup>

#### 対象V

⑬三二六一、二と⑭二八八一・⑮二八九二・

⑯二四一五等

◆小治田之 年魚道之水平 間無曾 人者挹云 時自久曾 人者飲云 挹人之 無間之如 飲人之 不時之如

吾妹子尔 吾恋良久波 已時毛無 (13三二六〇)

反歌

思遣 為便乃田付毛 今者無 於君不相而 年之經去者

(13三二六一)

今案 此反歌謂之於君不相者於理不合也 宜言於妹不相也

或本反歌曰

緒垣 久時從 恋為者 吾帶緩 朝夕每 (13三二六二)

右三首

★立而居 為便乃田時毛 今者無 妹尔不相而 月之經去者

(12二八八一)

或本歌曰 君之目不見而 月之經去者

☆思遣 為便乃田時毛 吾者無 不相数多 月之經去者

(12二八九二)

○念八流 跡状毛我者 今者無 妹二不相而 年之經行者

(12二九四一)

△虚蟬之 宇都思情毛 吾者無 妹乎不相見而 年之經去者

(12二九六〇)

▲三空去 名之惜毛 吾者無 不相日数多 年之經者

(12二八七九)

▽ 又大伴宿祢家持和歌三首（内の一）

今時者四 名之惜雲 吾者無 妹丹因者 千遍立十方

(4七三二)

▽ 山口女王贈大伴宿祢家持歌五首（内の一）

劍大刀 名惜雲 吾者無 君尔不相而 年之經去礼者

(4六一六)

◇未通女等之 袖振山乃 水垣之 久時從 憶寸吾者

(4五〇一 人麻呂)

□處女等乎 袖振山 水垣乃 久時由 念来吾等

(11二四一五 人麻呂歌集)

■白細布乃 袖觸而夜 吾背子尔 吾恋落波 止時裳無

(12二六一二)

掲出の三二六〇番長歌と類歌関係にある歌は、天武天皇の巻一の二五、二六番、そして巻十三の三二九三番と多くあり、歌謡性を有した長歌が広く伝誦享受され流布していたことを示す例としてよく引用される歌である。そしてこの長歌に付せられた反歌が、後の付加物であるということも広く指摘されているところである。

その反歌（三二六一）に、掲出の類歌が三首（12二八八一、二八九二、二九四一）存在する。一字一句まで全く同じというわけではなく、それぞれが微妙に異同を有し少しずつずれているところが、かえってこの一連の類

歌が広く享受され流用され流布していたことを示している。他にも二九六〇、二八七九番歌のように一部類似した歌があることも、そのことを一層保証する。

そしてさらに注目されるのが三二六一番歌の左注である。長歌が男の立場、反歌が女の立場で詠まれている統一がとれていないことに疑義の念を持ち、反歌の「君」を「妹」にすべしと述べている。「君」と「妹」の異同・変換という問題は、この三二六一番歌と類歌関係にある掲出の二八八一番歌にもそのまま見られる。本文歌は「妹」を詠み、或本歌は「君」を詠んでいる。これは、この一連の類歌が、それぞれの状況に応じて「君」「妹」を使い分けつつ広く作られ、享受されていたことを意味する。こういったかなり自在な伝誦流用流布の同種の世界の中に、三二六〇長歌に付加された反歌も、卷十二の歌々も置かれていたものと考えられる。

三二六〇番歌の「或本反歌」として置かれている三二六二番歌については、二重傍線部のような類似表現が、掲出の人麻呂歌及び人麻呂歌集歌に見られる。この三首の関係を、土居光知「萬葉集第七、十一、十二、十三巻の編集年代と各巻の特質」(『東京女子大学論集』第六巻二号、一九五六・三)は、卷四の五〇一番歌を原歌と考

え、それが卷十一の二四一五番歌の「民衆の歌」となり、次に三二六二番歌となったと考えている。五〇一番歌と二四一五番歌の前後関係については両様の見解があるが、少なくとも三二六二番の或本反歌は、人麻呂歌、人麻呂歌集歌が元になっていることは確かである。

なお長歌の末尾部(破線部)と類似の表現を有する歌が、卷十二の二六一二番歌に見られる。この影響関係のあり方も幾通りかに想定できるが、この長歌が様々に流伝し変化を見せていること、さらには第二節でみた具体例からの結論に依れば、両者の共通基盤から生じた類似表現であろう。

#### 対象Ⅵ

⑬三二七一と⑫三〇二五

◆刺将焼 小屋之四忌屋尔 搔将棄 破薦乎敷而 所格  
将折 鬼之四忌手乎 指易而 将宿君故 赤根刺 昼  
者終尔 野干玉之 夜者須柄尔 此床乃 比師跡鳴左  
右 嘆鶴鴨 (⑬三二七〇)

#### 反歌

我情 焼毛吾有 愛八師 君尔恋毛 我之心柄

右二首

(⑬三二七一)



★石走 垂水之水能 早敷八師 君尔恋良久 吾情柄

☆冬隠 春乃大野乎 焼人者 焼不足香文 吾情熾 (12三〇二五)

長歌の冒頭部の「焼」と反歌の「焼」とでは、同じ「焼」

でも、その対象もそれに込められた心情も相異しており、その意味でこの反歌は原初からのものではないと判断できる。この反歌と類似した表現を持つ歌は掲出の二首程度で、しかも類似表現が一首全体に及ぶというほどの類歌ではない。それぞれに独自の情と景を詠む、巻十二と巻七の二首の表現を合成するようなかたちで、三二七一反歌が出来上がっている。この場合の關係は、今まで見てきたよりも緩い繋がりをもって、巻十三と巻十二及び巻七の所収歌がその基盤を共有していると言えよう。

対象Ⅶ 13三二八三と12二九五七・12三二二〇

◆妾背兒者 雖待来不益 天原 振左氣見者 黒玉之

夜毛深去来 左夜深而 荒風乃吹者 立待留 吾袖尔

零雪者 凍渡奴 今更 公来座哉 左奈葛 後毛相得

名草武類 心乎持而 二袖持 床打払 卯管庭 君尔

波不相 夢谷 相跡所見社 天之足夜乎 (13三二八〇)

或本歌曰

吾背子者 待跡不来 鴈音文 動而寒 烏玉乃 宵文

深去来 左夜深跡 阿下乃吹者 立待尔 吾衣袖尔

置霜文 氷丹左靱渡 落雪母 凍渡奴 今更君来目八

左奈葛 後文将会常 大舟乃 思憑迹 現庭 君者不

相 夢谷 相所見欲 天之足夜尔 (13三二八一)

反歌

衣袖丹 山下吹而 寒夜乎 君不来者 独鴨寐

今更 恋友君二 相目八毛 眠夜乎不落 夢所見欲 (13三二八二)

右四首

★從今者 雖恋妹尔 将相哉母 床辺不離 夢尔所見乞 (12二九五七)

☆今更 将寐哉我背子 荒田夜之 全夜毛不落 夢所見欲 (12三二二〇)

△我心 等望使念 新夜 一夜不落 夢見与 (12二八四二 柿本人麻呂歌集)

▲里遠 眷浦経 真鏡 床重不去 夢所見与 (11二五〇一 柿本人麻呂歌集)

▽里遠 恋和備尔家里 真十鏡 面影不去 夢所見社

(11二六三四)

右一首上見柿本朝臣人麻呂之歌中也 但以句々相換 故載於茲

▼大原 古郷 妹置 吾稻金津 夢所見乞 (11二五八七)

◇ 紀伊国作歌二首

吾恋 妹相佐受 玉浦丹 衣片敷 一鴨將寐

(9一六九二 柿本人麻呂歌集)

玉匣 開卷惜 愜夜矣 袖可礼而 一鴨將寐

(9一六九三 柿本人麻呂歌集)

三二八〇番の長歌には、三二八一番の或本歌の長歌が並べて置かれているが、表現は極めて類似しており広く流布し享受されていたことを思わせる。

反歌を中心に長歌も含めて、四種の傍線を付したような類似表現が見られる。反歌の三二八三番歌は、巻十二の二九五七番歌と三一二〇番歌を合成したかのような類似表現を持つ。この他にも一部分が類似表現を有する歌は、幾種かの傍線を施したように、巻九の柿本人麻呂歌集所出歌も含めて多く見られる。また長歌的部分的な表現を繋ぎ合わせていくと、「独鴨寐」のような長歌には見られない表現もあるものの、ほぼ反歌が出来上がるといった側面も持つ。

このような状況を概括するなら、掲出の巻十三、巻十一・十二、人麻呂歌集所出の歌々は、傍線を付したような相聞表現を共通の基盤として、出来上がっていると言える。とりわけ巻十三反歌の三二八三番歌と巻十二の二九五七、三一二〇番歌は、同一基盤上で相互に関連しながら成った歌と考えられる。

対象Ⅷ

13三二八五と11二五三七、及び長歌三二八四の一部分と1112等

◆菅根之 根毛一伏三向擬呂尔 吾念有 妹尔縁而者  
言之禁毛 無在乞常 齊戸乎 石相穿居 竹珠乎 無  
間貫垂 天地之 神祇乎曾吾祈 甚毛為便無見 (13三二八四)

今案 不可言之因妹者 応謂之縁君也 何則反歌云公之隨意焉

反歌

足千根乃 母尔毛不謂 愜有之 心者縦 公之隨意 (13三二八五)

或本歌曰

玉手次 不懸時無 吾念有 君尔依者 倭文幣乎 手  
取持而 竹珠叫 之自二貫垂 天地之 神叫曾吾乞

痛毛須部奈見

（13三二八六）

反歌

乾坤乃 神乎禱而 吾恋 公以必 不相在目八

（13三二八七）

或本歌曰

大船之 思憑而 木妨己 弥遠長 我念有 君尔依而

者 言之故毛 無有欲得 木綿手次 肩荷取懸 忌戸

乎 齊穿居 玄黄之 神祇二衣吾祈 甚毛為便無見

（13三二八八）

右五首

★足千根乃 母尔不知所知 吾持留 心者吉惠 君之隨意

△菅根之 勸妹尔

恋西 益卜男心

（11二五三七）

▽菅根之 惻隠々々

照日 乾哉吾袖

（11二七五八）

於妹不相為

■④五八〇、④七九一、①一四七二、①一四七三、①二八

六三、①三〇五三、①三〇五四、②四四五四

恋の成就を神に祈るという内容の歌が、反歌を伴うもの二組、伴わないもの一組、計三組が並べられていて、これらの歌が広く享受流用されていたことを今に伝えて

いる。<sup>3</sup>長歌の傍線部「菅根之 根毛一伏三向擬呂尔」の表現は、掲出した巻十一の二七五八番歌、巻十二の二八五七番歌、そして■印のもとに歌番号のみを記したが、巻十一・十二を中心に巻四、巻二十の歌々にも広く見られる相聞表現であり、巻十三の歌もこうした基盤の上に成っていると言えよう。

そして反歌については、三三八四番長歌が、その左注で、三三八五番反歌と男・女の立場が異なることを問題としている。同種の左注は先にも見た通りで、この種の歌が伝誦流用配布の世界に属していたことを示している。さらにはこの発言は、三三八五番反歌は長歌の原初から備わっていたものではなく、後の付加であるという編者の考えを前提としてなされたものであると見ることが出来る。

この反歌に、酷似した類歌が巻十一の二五三七番に存在する。これは三二八四番長歌に反歌が付着するに際して、巻十一所収歌の基盤が預かって力のあったことを示しているし、もう少し踏み込んで言えば、この場合は、巻十一の二五三七番歌が、三二八四番歌の反歌として活用されたものと考えられる。

対象Ⅸ

⑬三二九八と⑫二八六九・⑫二九三六・⑪二三五五

◆玉田次 不懸時無 吾念 妹西不会波 赤根刺 日者  
之弥良尔 烏王之 夜者醉辛二 眠不睡尔 妹恋丹  
生流為便無 (⑬三二九七)

反歌

縦恵八師 二々火四吾妹 生友 各鑿社吾 恋度七目  
(⑬三二九八)

右二首

★今者吾者 将死与吾妹 不相而 念渡者 安毛無

☆今者吾者 指南与我兄 恋為者 一夜一日毛 安毛無  
(⑫二八六九)

▲恵得 吾念妹者 早裳死耶 雖生 吾邇応依 人云名国  
(⑫二九三六)

□今者吾波 将死与吾背 生十方 吾二可縁跡 言跡云  
(⑪二三三五 柿本人麻呂歌集)

莫苦荷 (④六八四 大伴坂上郎女)

ここに掲げた歌にはそれ程多くの類似表現は見られない。「死なむよ吾妹（吾背）」という万葉集中数少ない言  
い方が共通している程度である。

ところでこの共通表現を有する卷十二の二八六九番歌

と二九三六番歌とは、一首の歌の構造は同一の歌である  
と云ってよいが、同一の構造を持ちながら、各句で微妙  
に表現を異にしている点、またそれぞれが「吾妹」と「我  
兄」と、男女別様の立場で歌われている点が、この二首  
の幅広い享受と流用の有りようを物語っている。そして  
また掲出の卷四、六八四番の大伴坂上郎女歌は、この卷  
十二の二首に加えて、掲出の卷十一、二三五五番の人麻  
呂歌集所出歌をも取り込み咀嚼したかたちで詠まれたも  
のと考えられる。

以上掲出した四首のこのようなあり方から推すと、三  
二九七番歌に付せられた三二九八番反歌も、人麻呂歌集  
歌の広範な享受のもと、こうした卷十二の歌と同一基盤  
の上に成ったものと考えられる。

対象Ⅹ

⑬三三〇六と⑪二五九七

◆物不念 道行去毛 青山乎 振放見者 茵花 香未通  
女 桜花 盛未通女 汝乎曾母 吾丹依云 吾叫毛曾  
汝丹依云 荒山毛 人師依者 余所留跡序云 汝心勤  
(⑬三三〇五)

反歌

何為而 恋止物序 天地乃 神乎待迹 吾八思益

◇然有社 年乃八歳叫 鑽髪乃 吾同子叫過 橘 末枝  
 乎過而 此河能 下文長 汝情待 (13三三〇七)

反歌

天地之 神尾母吾者 袴而寸 恋云物者 都不止来

(13三三〇八)

柿本朝臣人麻呂之集歌

物不念 路行去裳 青山乎 振酒見者 都追慈花 尔  
 太遙越壳 作楽花 佐可遙越壳 汝乎叙母 吾尔依云  
 吾乎叙物 汝尔依云 汝者如何念也 念社 歳八年乎  
 斬髪 与知子乎過 橘之 末枝乎須具里 此川之下  
 母長久 汝心待 (13三三〇九)

右五首

☆何為而 忘物 吾妹子丹 恋益跡 所忘莫苦二

(11二五九七)

「問答」部に収められた掲出「右五首」の成り立ちについては、種々の場合を想定することができるが、前稿「万葉集卷十三長歌の実態―「里人の我に告ぐらく」歌の原初形態の想定をめぐって―」（『シュンポシオン』第二号、一九九七・三）では、三三〇五番と三三〇七番の二つの長歌が問答形式で歌われたのが原初形態で、この

二首を繋いで一首に仕立てたのが、人麻呂歌集所出の三三〇九番歌であると考えた。そして長歌に付せられた二首の反歌については、二首相互が付き過ぎるほどに相關連した内容を持ち、しかも見方によっては平板に過ぎるほどに滑らかに前歌が後歌を承けている点からして、この反歌は初めから二首の長歌に付せられていたのではなく、後に二首が一組として一緒に作られて、二首の長歌に一首ずつ付されたものと考えた。

その三三〇六番反歌に、類歌として卷十一、二五九七番歌が存在する。この二首も、同一歌ではあるが、細部では微妙に差異があり、どちらかがどちらかにスライドさせたというような単純な関係ではない。やはりこれまで見てきたように、この二首は、卷十三反歌と卷十一・十二所収歌との間の自在な流用流布の世界という、共通の基盤のうえに成ったものと考えられる。

四 おわりに

卷十三と卷十一・十二所収歌のうち、両者が類歌関係にある歌について具体的に見てきた。卷十三所収の歌々は、歌の古新という面で言っても種々多様であって一律にその性格を規定することは出来ないが、少なくとも卷

十一・十二と類歌関係にある歌に限って言えば、比較的新しい歌が多く、卷十一・十二と基盤を共有して成ったもの、相互に広く流用し享受してその表現・内容を膨らませていったものであろうことを見た。とりわけ第三節で見たように、長歌に後に付された反歌には一層その傾向が顕著であることが確かめられた。

なお、卷十三、十一・十二に収められた歌々の成り立ちについては、以上みてきたように、各歌相互に交流し合うような共通基盤を想定できるが、一方これらの巻に採録される際の編纂資料といった面から言えば、編纂資料としての存在場所は別個であったと考えるのがよいだろう。卷十三のような長歌が歌われ、享受され、そして記録された場合は、やはり卷十一・十二の歌のそれとは別であったであらうと考えられるからである。

注

- (1) 卷十三反歌と卷十一、十二所収歌とが類歌関係にある歌について、真正面から考察を加えた論文に、小野寺静子「万葉集卷十三反歌論」『国語国文研究』第四一号、一九六八・九がある。本稿では論述上直接引用することができなかったが、小野寺論文は「卷十三の反歌には、原初的なものも

も存するが、原初的と見えるその中でも、原初でないものがあり、後期万葉歌人及び卷十一、十二と類歌を持つものは、民謡、口謡にその理由を求める事は出来ず、後期万葉歌人と同系列の歌とみることが出来る<sup>3</sup>と考えるのである。」と結論づけている。本稿もほぼ賛成である。本稿ではしばしば「自在な伝誦流用流布」という言い方をしているが、もちろんこれも古い「民謡」を意味しているわけではない。ただ当代での口誦という側面は否定できないと思う。

- (2) 遠藤宏「万葉集卷十三における異伝―後期的文学営為検討のための一視点として―」『大久間喜一郎博士古稀記念古代伝承論』一九八七・一二、『古代和歌の基層』所収は、この三組の長歌には、共通の原核となる短歌形式の歌があったと考えられること、そしてそれにそれぞれ修飾句が附加されて、三組の長歌となったと説いた。橋本達雄「万葉集卷十三の反歌・或本歌の一考察」(尾畑喜一郎編『記紀万葉の新研究』一九九二・一二所収)は、この遠藤論文を踏まえ、さらに進めて、二組の「或本歌」長歌のうち、第一或本歌(三二八六番歌)は金村の新作、第二或本歌(三二八八番歌)は金村が周辺の誰かの作であろうとの論を展開している。

- (3) 卷十一・十二には、柿本人麻呂歌集所出の歌と出典不明

の歌とが収められている。両者の関係については、様々な見解があるが、本稿では、巻十一・十二「古今相聞往来歌類」の「古」を人麻呂歌集所出歌と見、「今」を出典不明歌と見る伊藤博著『萬葉集の構造と成立上』（一九七四年）の万葉集編纂構造論の立場に依り、また表現・内容面でも、人麻呂歌集歌を「古」と見る稲岡耕二著『萬葉集全注 卷第十一』（一九九八年）の見解にはば依った。ただ、本稿のように、それぞれの所収歌の成り立ち、或いは成り立ちに関わる影響関係を考える場合は、人麻呂歌集歌が古いからといって、即人麻呂歌集歌から巻十三或いは巻十一・十二出典不明歌へといった直接的単純な図式を描くことはできない。人麻呂歌集も、時間的にも空間的にももう少し広範な広がりを持つ享受・流用の相として捉えた。

また巻十一と十二の所収歌については、厳密には両者を区別して考えるべきであるが、この場合も、やはり享受・流用の相として捉えようとする本稿においては、あまりに厳密に区別することに意味はないと考え、巻十一・十二と大雑把にひとまとめにして扱った。ただし結果として、巻十一よりも巻十二所収歌の方に、巻十三所収歌との関わりが深いことが数のうえでの傾向として出てきた。

〔附記〕本稿の骨子は「万葉集の編纂と成立を考える会」（一九九八・九・一三、於中京大学）において発表しました。席上皆さまから貴重な質問と助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。